

# ひとりから

真宗大谷派青少幼年センター機関紙『ひとりから』  
発行日/2013年12月1日(年4回発行)  
発行所/真宗大谷派(東本願寺)青少幼年センター  
〒600-8168 京都市下京区室町通六条下る  
TEL: 075-354-3440 FAX: 075-351-9599  
E-mail: oyc@higashihonganji.or.jp  
発行人/青少幼年センター長 木越 渉



## 蓮ちゃん通信 その①

### 雪に愉しむ池の平開催!

今年度の「雪に愉しむ池の平」(池の平青少幼年センターで開催)は、3月1日④・2日⑤に開催されます。ぜひご家族でご参加ください。

詳しくは、高田教務所内池の平青少幼年センター係 ☎025-524-3913 までお問合せください。



池の平青少幼年センター

検索

### 子ども会情報募集中!

“お寺につどう子どもたち”の写真や子ども会の内容をぜひお寄せください。

宛先は、「郵送」または「E-mail」  
oyc@higashihonganji.or.jp  
にて「ひとりから」子ども会情報係まで

「雪に愉しむ池の平 with 子ども報恩講 2013」  
(新潟県妙高市の池の平青少幼年センターにて)

## いのちは誰のものか

青少幼年スタッフ 加藤久晴

「いのちは誰のものか」これは信國淳先生の言葉です。同朋ジュニア大会が始まった二十数年前、大会のテーマとして掲げられていました。

スタッフとして参加した私は、「子どもたちがゲームをして、楽しい夏の思い出を本山で作って帰ってくれたらそれでいいのではないか」と思っていました。「いのちは誰のものか」そんなことは決まっている、「自分のものだ」と「そう思っていた私は、テーマに掲げられている意味もわかりませんでした。

しかし今、思うのです。「いのちは誰のものか」というテーマの大切さを。

多くの子どもたちは「いのちは誰のものか」と問われたことがないと思います。私自身がそうでした。考えたことのないことを考える、正解と言える答えのない問いに向き合う。そこに大切なものがあると感じるのです。お寺は学校や塾やスポーツ教室では出会えないことに出会う「場」なのかもしれません。

# 共命鳥

く みょうりゅう ちやうりゅう

北海道教区

金石 かねいし

潤導 じゆんどう



平太は小学6年生。ちよっと変わった子です。人と違うことをするのが普通で、名前とは裏腹でヘソがだいぶん曲がっています。お母さんが何か言うたびに、決まってその反対のことをします。「早く起きなさい」と言われれば寝坊をし、「早く飯を食いなさい」と言われれば「おながが痛い」と言い返す、「早く勉強しなさい」と言われればゲームを始めます。運動会の時なんかは、お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんが応援すればするほど、そのことに応えようとしませんでした。足は決して遅くはないはずなのに、「ガンバレ」と声をかけられると、いつもどん尻でゴールしました。先生の言うことも聞きません。先生が「みんなと力を合わせて…」と言つと、その場から離れていきます。

困り果てた平太のお父さんとお母さんは、「このままでは平太がどんな大人になってしまつか心配です。なにかいい方法はありませんか?」と、お寺の住職さんに相談をしました。そこで住職さんは、たいへん興味をもたれて「一度、平太をお寺に連れておいでなさい。わたしが平太と話をし

てみます。そして平太が何を思っているのか聞いてみましょう」と言つて、住職さんと平太は会うことになりました。

住職さんは平太に、共命鳥という仏さまの国に住む鳥の話を始めました。「平太よ、そのむかし共命鳥と呼ばれる、体がひとつで頭がふたつという鳥がおつてな。頭がふたつということは、思いがふたつあるということだ。そして、いつも別々なことを考えているのだ。こつちの頭が水を飲みに行こうと思つと、あつちの頭がエサを捕まえようとする。こつちの頭が木の枝にとまろうとすると、あつちの頭が空を飛びたがる。いつもやりたいことが違うものだから、お互いをもてあますわけだ。それで、もしあつちの頭がいなかったら、こつちは自分の思い通りの生き方ができ

## 子どもたちと聞く法話

きるはずだ。そうならたらどんなに楽しいだろうと思つて、とうとうあつちの頭をつつき殺してしまったのだ。しかし、これで自由だと思つたのも束の間、体はひとつだから、やがてはこつちの頭も死んでしまう。ところが共命鳥は、死んでしまふ前に大切なことに気がついたというのだ。それは、それぞれ考えていることは違つけれど、お互いが同じ大きないのちに生かされていたことがよくわかつたというのだ。だから共命鳥は今も仏さまの国から私たちに、仏さまの教えを聞くのですよと、美しい声で毎日鳴いているというのだよ。平太よ、どう思う?」

平太はしばらくして「違うよ。共命鳥は苦しかったんだと思う。僕の頭もふたつあるからわかるんだ。親の言うことをよく聞きたい子、期待に応える優等生。そうなればみんな喜んでくれることは知っている。だけど、それが本当の僕なのかわからないんだ。早くしないといけないと考える自分がいるかと思えば、何かのいいなりになれないもう一人の自分があるんだよ。僕と僕とがいつもぶつかり合つんだ。でも体はひとつなんだよね。共命鳥は自分が死んでしまつことを知っていたはずだよと、肩を震わせながら言いました。住職さんは「辛かつたんだな」と平太の震える肩を抱きました。そのとき、平太は「あつ、共命鳥は仏さまの国が

ら僕を心配してくれていたんだね」と、つぶやいて微笑んだのでした。次の日、住職さんは平太のお父さんとお母さんに、その日の出来事を聞かせました。すると、お父さんもお母さんも口をそろえて「わたし達も平太のためと言いつつ、自分の思いを平太に押しつけていたのですね」と反省しながらも晴れ晴れと言つたのでありました。平太は、今も相変わらずのヘソ曲がりです…。

### 蓮ちゃん通信 その②

#### リーフレット「ほとけの子」(無償)

青少幼年センターでは、「親鸞さま」「報恩講」「修正会」「花まつり」「お盆」「お彼岸」「蓮如さま」「善財童子」の8種類のリーフレットを無償でご用意しております。季節・行事にあわせてご利用ください。 ※詳しくは、各教務所にお問合せください。





# マサコのちょこっとインタビュー



青少年センターでは  
メール相談窓口を開設しております!

子どもたちの悩みごとに  
サガエさんがお返事します

sagaesan@higashihonganji.or.jp

(上記のアドレスから返信しますので、受信拒否設定にご注意ください)

## いよいよ、 子ども会スタートです

**マサコ** いろいろと計画をして、子ども会当日を迎えるわけですが、思い通りに進まないことのほうが多いように感じます。どうしたらうまくいくのでしょうか?

**サガエさん** どなたでも、準備しながら「うまくいってほしい」「うまくいくはずだ」と思いがちです。でも、うまくいくときもあれば、うまくいかないときもあると、考えてはじまるといいですね。すぐに遊びをはじめめる元気な子どももいれば、集団が苦手なスロースタートの子もいます。どちらも、もちろんいいとおもうのです。主催者が懸命になるあまり、喋るのが苦手な子に無理に喋らせたり、グループの輪の中に無理に入れてしまうことありませんか。話さなくても、輪に入っていないだけでも、その子は何か大事なものをしているかもしれません。その場にいることを大切にしてください。

お寺の子ども会の「場」というのは、そこに身を置いてくれることが何よりも大事なのだとおもう

のです。子ども会を主催する住職さんや坊主さんたちの話をシャワーのように浴びることがいいとおもうのです。そこで元気よく発言したり、遊びまわることだけが求められているわけではないからです。自分から話したり、輪の中に入るそのタイミングまで、待ってあげるのも大事ですね。

## いろんな「ひとり」を大切に

**マサコ** 個人戦やグループで行うゲームも、子ども会のプログラムによく取り入れられます。点数や勝ち負けを競うゲームは白熱して、みんなの前で失敗するとその場にいられず、陰に隠れてなかなか出てこなくなる子がいたり、チームでミスをした子をみんなで一斉に責めてしまったり…そういった場面を見かけることがあります。主催者や周りにいる大人はどういうまなざしで接したらいいのでしょうか?

**サガエさん** 「大丈夫、大丈夫」という言い方も、「放っておこう」というのも、どちらも違和感があります。もし落ち込んで、つらい思いをしているのであれば、その子が「ひとり」になる時間が必要だとおもいます。そのような場面こそ、自分との対話が芽生えるときですから大切にしたいものです。「つまづき」がないように配慮する教育が蔓延していますが、「つまづき」

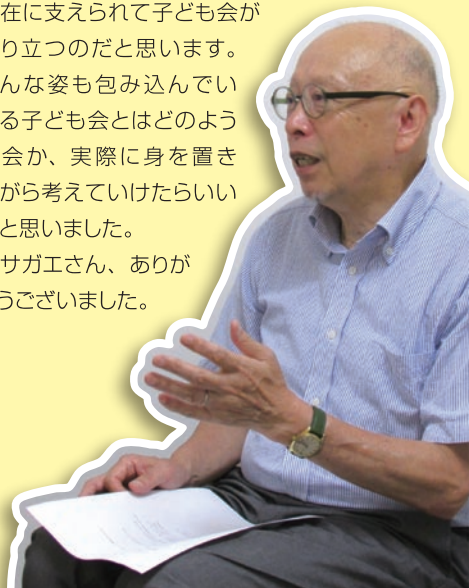
で大事だとおもうのです。自分と対話するのを見守ることができれば、それがお寺で子ども会を主催する意義のひとつだと思います。たとえば、「落ちついたらおいで、待ってるよ」という声掛けをしたり、一歩でも半歩でもこちらに向いたら「おいで」と迎え入れたらよいです。

**マサコ** 人数が多くなったり、季節の行事で規模が大きくなればなるほど、特別な場だと力んで、頑張りすぎてしまうこともあります。そんなときどうしたらいいでしょう?

**サガエさん** あまり特別に考えずにご自分の普段の生活の中で無理のない姿勢で、そして、丁寧であればいいとおもいます。もし、バラエティに富んだ内容を考えておられるのであれば、本山や教区で開催される催しにスタッフとして参加されるといいですね。体験して、遊びやゲームのレパートリーをひとつずつ増やすといいですね。

**マサコ** いろんな「ひとり」がいて、その存在に支えられて子ども会が成り立つのだと思います。どんな姿も包み込んでいける子ども会とはどのような会か、実際に身を置きながら考えていけたらいいなと思いました。

サガエさん、ありがとうございました。



## マサコ

機関紙「ひとりから」の編集長をつとめる。青少年スタッフでもある。

## 佐賀枝 夏文

1948年生まれ。大谷大学修士課程修了。児童福祉施設等での児童指導員、心理判定員を経て、現在は大谷大学文学部教授で大谷幼稚園長を兼務。青少年センターの研究員でもある。カウンセラーネーム「サガエさん」です。

## 蓮ちゃん通信 その③

### 子ども会開設の手引き 「ひとりからはじめる子ども会」 (改訂版) 発行!!

「私ひとりからはじめること」、「子どもひとり」と出会うことをコンセプトに、子ども会の準備から実践までを紹介している手引書です。あなたもこの手引きをきっかけに、まずは気負わず子ども会を開いてみませんか?

※無償で送付いたします。青少年センターまでお問合せください。



◎子ども会開設の手引き「ひとりからはじめる子ども会」の改訂版が発行になりました。この機関紙「ひとりから」をはじめ「ひとりからはじめる子ども会」という動きが今連動しつつあります。二〇一四年の青少年センターの動きにもぜひご注目ください。次号は花まつりをテーマに来年三月一日発行予定です。一ひとりからはじめる年の暮(青七主幹)

◎「共命鳥」に出てくる平太くんは、なぜ住職さんに思いを打ち明けられたのか…平太くんのエピソードやサガエさんへのインタビューから、改めてお寺とはどのような場所なのかと問われたように思います。その問いを大事に抱えながら、子どもたちと過ごしていきたいものです。(編集長)

編集後記

